

談話室

談話室

環境における色彩の重要性

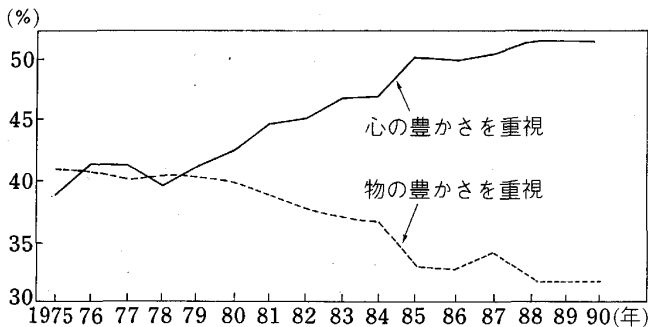
跡部 禮子*

日本ペイント(株)カラーデザインセンター

[環境];人間が知覚, 行動, 生活しようとする全ての空間 = 自然であり, 都市であり, 過疎地であり, 工場地帯であり, 仕事の間, 休息の間, 学びの間, 遊びの間, 等々, 自己を包括する私的, 公的あらゆる外界である。

この [環境] にとって色彩が改めて重要視され出している理由について考えてみると, 第二次大戦後, 高度成長時代の技術革新によってもたらされた人工加工色の拡大が, 自然環境や人間の生活環境を圧迫し始め, 旧来豊かで, 美しかった自然環境色の魅力に代わるものとならなくなったこと, 自然との不均衡さが環境阻害をもたらしてしまい, 第二の自然と呼べる環境色彩を構成しえなかったことにある。

近年, 特に日本人の間で豊かさを実感できる質の高い環境を創造していくことが, 求められている。その環境としての色彩について学術的な調査研究や技術開発を総合的, 複合的に行うことはもちろん必要であるが, 総理府の「国民生活に関する世論調査」によると, (図 1) に示された如く, 日本人が希求する豊かな社会へのキートレンドが, 物の豊かさや利便性よりは, 心の豊かさ, 美意識の高揚, 快適性, うるおいのある環境へと大きく変化していることは, 環境における色彩が改めて重要視されている理由であり, その社会的意義がここにあると考える。



参考資料: 総理府「国民生活に関する世論調査」による

(図 1)

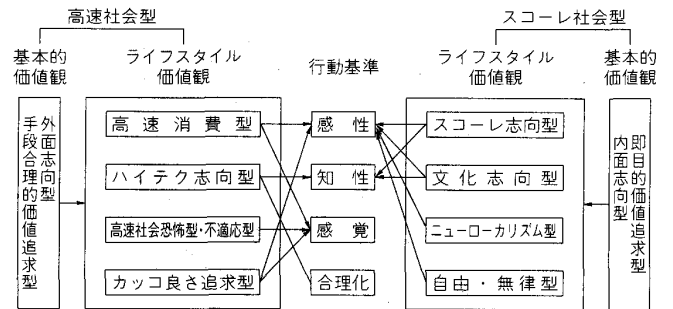
そして, 価値観の変化, 多様化が言われて久しいが日本人の生活価値観の変化を社会変化のキートレンドとして (図 2) に示している。

ここで, 日本の産業社会は高度経済成長以来, 「高速

社会変化のキートレンド	
これまで	これから
・乱雑	—— 美・快適・感性
・フロー	—— 蓄積・ゆとり
・義務感	—— 遊び・プレイ感覚
・経済・実用	—— 文化・オリジナリティ
・知識	—— 知恵
・モザイク	—— 融合・ネットワーク
・効率	—— 無駄・弊
・画一・安定	—— 選択肢
・成長至上主義	—— 夢・可能性の拡がり
・実利	—— 風格・品格・気品
・自分主義	—— 利他主義
・ビュロクラシー	—— 努力が報われる
・マイホーム	—— ボランティア精神
・省力化	—— フレキシブル
・中流・人並み志向	—— 個性主義

(図 2)

社会」化を軸に発展してきた。それに近年は, 特に, 高度先端技術や情報通信技術の発達でそのテンポはますます早まっている。しかし, 人間や生活のリズムを超えた高速化には限界があり, 国民の欲求も機能や利便性から [遊・学・創造] を重視する「スコア社会」化のライフスタイルにその価値観が切り替わりつつある (図 3)。



「高速社会」と「スコア社会」の価値観
参考資料 - 日本リサーチ総合研究所による

(図 3)

スコア社会型の最も典型的な価値観が, 仕事の目的は余暇を生むためのもので, 仕事自体も創造的であるためには, 遊びの要素を取り入れることが必要と考える人が 70% に達し, いずれにしても時間的なゆとりと創造重視を大切にする価値観に基づくライフスタイルは, 90 年代に主導的な役割を果たすと予測されている。

こうした社会動向の変化に対応する色彩の役割は, 新しい, 豊かな, 質の高い環境づくりに貢献することにある。それは色彩が単なる美的欲求解消の糸口となるだけでなく, 自然の恵みを人間に与えるという意図をよりの確にしていけるために, 自然と人工物との共存を媒介する重要な役割があり, 自然をより引き立て, 自然環境と人工環境との境目を処理していく人工物の表皮を被う色彩こそが, その目的を果たせるからである。環境のトータ

*跡部禮子氏は新日本製鉄(株)富津総合技術センターのトータルカラープランニングの監修を勤められた。

ルカラープランニングとしての目的を遂行する際、色彩は発生している全てのものに対して、その尊厳を認めねばならない。例えば、断片化した人工物や、破壊化した自然物にまとまりのある実像をとり戻さねばならない。

従って、その統合には相反するものも排除せず共存させる力が必要であり、この本質こそが環境における色彩の社会的意義に他ならず、人間尊重を配慮した豊かな環境色彩の創造をなしうる所以と考える。

研究は短し、人生は長し

石川 圭介

金属材料技術研究所 筑波支所

かつて、佳人は、“人生は短し、芸術は長し”と嘆いたが、いったい研究は長いのだろうか、それとも短いのだろうか。研究にかかわる寿命について考えてみたい。

研究そのものの寿命もあるでしょう、それを担う研究者の寿命、すなわち研究能力の寿命、それとそれらの組織体である研究所の寿命、さらに研究成果の寿命等が考えられましょう。

まず、研究の寿命であります。一般に研究テーマは1年、3年あるいは長くても10年と限られているのが通常である。課題によっては、永遠のものも有ろうが、ブームとなる研究は以外とピークは短い。中には、短い寿命を終えた後、暫くたって復活し、最盛期を迎えるものもある。しかし、一般には研究そのものの寿命は短いと考えるべきであろう。最近のように次々に新しい課題が見いだされ、研究のペースが速い時代においては、研究は早い時期にピークに達してしまう。そのため、研究の最盛期にはその研究の根幹を形成している基本的な問題はほとんど解決されているからであろう。

それでは、その研究を担う研究者の寿命はいかなものであろうか。基礎科学の分野においては、35才が限界であるともいわれている。これは、人間の平均寿命からみると余りにも短すぎるのではないのでしょうか。では、経験がものをいうといわれている分野においてはどうか。おそらく研究分野が長期間にわたって固定して変化の少ない時代には経験が有効であったろうが、研究の前線が拡大し、かつ境界領域の占める比率が高い現代においては、かつての経験もさほど研究の決め手にはならないのではないか。一方、現代風に焼きなおしているものもあろうが、決してその数は多くはないだろう。

では、研究者の組織体である研究所には寿命はあるのでしょうか。研究所が設立された当時は、その時代に相応したミッションを担っていたはずである。その後、研

究環境の変化にともない改革等が、どの研究所にもなされていようが、設立当時ほどの斬新さが期待できないのが、現実であろう。基礎物理部門においては研究所の寿命は四半世紀といわれているそうです。その期間に、ノーベル賞を受賞するのが研究所の評価だそうです。中央研究所ブームに建設された研究所が、最近改組されているところをみると、基礎部門以外でもそれに近いことがいえるのではないだろうか。

学術雑誌も、最近時代の風潮に迎合して名称の変更が盛んに行われているのはご存知のとおりですが、「鉄と鋼」の先輩筋にあたる、「Journal of Iron and Steel Institute」が廃刊になって既に久しく、その存在すら知らない世代があるのではないのでしょうか。

研究論文の寿命は、引用される頻度の時間減衰、 $\exp(-t/\tau)$ に比例するとすると、ほとんど論文が印刷された段階で、 $\tau \sim 0$ であるようですから、残念ながら誕生と同時に図書館の書棚で眠りついてしまうこととなります。

総じて、研究の寿命は決して長いものとはいえないようです。皆さんは、この問題をどのように解決されているのですか。

中国留学記

岩村 貞光

元大同特殊鋼(株)

今から四年前の春の朝、テレビのチャンネルを回すと丁度 NHK の中国語講座の放映中、中国ののどかな風景に乗って中国女性アナウンサー王曉澄先生の耳に快くひびく流暢な中国語が耳に飛びこんで来た。我を忘れてその講座に引きこまれ、これが中国語に夢中になるきっかけでした。毎週、火曜と金曜の朝七時半からの三十分間は必ずテレビの前に入り込んで、さらにビデオもとって暇さえあれば夢中でそれに対面すると言う二年間の独学。その頃中国語を勉強するには直接中国に行って勉強してはどの家内の提案にのっかって中国留学を決意。どうせ行くなら日本人が少なく、昔、日本と深い関係を持っていた西安に行く事に決め旅行社に依頼、西安外国語学院に留学する事にした。1990年2月24日成田を発ち26日夜西安に到着。三ヶ月の留学生活のスタートです。留学生は日本人15名、アメリカ人4名、ベルギー人2名、ドイツ人1名の計22名。

それぞれの能力に従ってABCの三つの級に分けられての授業。勿論私はC級。若い人々の中に混ざって五十年前の学生時代の事など思い浮べながらの勉強です。二年間日本で勉強したとは言え、教室で先生のしゃべる